

への志願者が増加した。）

二次志願倍率の平均は、国立大で四・五倍、公立大で六・七倍で、国公立全体では四・九倍と、前年の四・八倍を上回りました。日程別でも、前期が三・三倍、後期は一〇・一倍と前年よりやや上昇しました。また少数の公立大で実施される中期も一三・七倍と昨年より〇・五上回りました。

私立大学でも三%の増加一般入試一%増、センター試験利用入試が七%増しました。要因としては

- ①センター試験利用大学・学部が増加、センター試験利用入試の複雑化、多様化
- ②学部増設、改組
- ③学外試験場の新増設
- ④受験料割引・減額制度、奨学生制度の導入
- ⑤全学部日程入試・全学部統一入試の導入

等が挙げられます。
（旺文社「進学時代」参照）
【本校生平成二三年三月卒業生の状況】

毎年夏休み中からエントリーできるAO・AC入試いわゆる自己推薦入試や一〇月の推薦入試から受験が始まります。

二三年三月卒業生は、国公立

大の推薦入試で、筑波大四名、茨城大学三名、県立医療大二名、埼玉大学一名の合計一〇名合格という成績でした。また、私立大の指定校推薦で五名と今年度はかなり少ない結果で、むしろ入試をした生徒の多い年でした。二六二名がセンター試験を受験し、その後、二月・三月の国公立大学の二次試験の受験対策に取り組む一方で、一月末からの私立大学一般入試にも挑みました。二月の自由登校になってからも、私立大の入試の合間に課外授業や小論文指導などを受けるために、多くの生徒が登校し、最後の後期試験まで諦めずに頑張りました。

センター試験では、特に理系に關係のある数ⅠA、物理Ⅰ、化学Ⅰの平均点が大幅にダウンした結果、慎重な出願と驚異的な粘りで、国公立大学合格者は一二名現役一〇五名に達しました。特に注目すべきは、近隣の筑波大学一二名・茨城大学三七名・宇都宮大学一九名・県立医療大学五名合計七三名と国公立全体で七〇%を占めました。この数字は県内（県立高校第

二位とすばらしいものでした。

これは担任団と生徒の信頼関係、そして生徒一人一人の懸命な努力のたまものです。この学年は一・二年で生徒指導に力を注いだお陰で、どのクラスも落ち着いて学習する環境が整備され、三年では勉学のみに集中することができました。三年間皆勤者六五名は例年になく記録でした。現役生では、東京工業大学・一橋大学といったトップレベルの難関大学へ合格した者、公立大学を一校だけ受験し合格した者もいます。浪人生では一年間の努力が実って首都大東京へ四名が合格しています。私立大学でも慶應義塾大学・早稲田大学と、いわゆるMARCH(明青立法中、東京理科大学合計で七六名等多くの難関大学へ合格しています。詳しくは別表をご覧ください。

実際の卒業後の進路状況は、今春の卒業生二七八名中、国公立大学進学者九三名・私立大学進学者一四二名・専門学校進学者四名・公務員一名・その他七名、「全入時代」に妥協せず捲土重来を期して浪人する者三一名という内訳です。

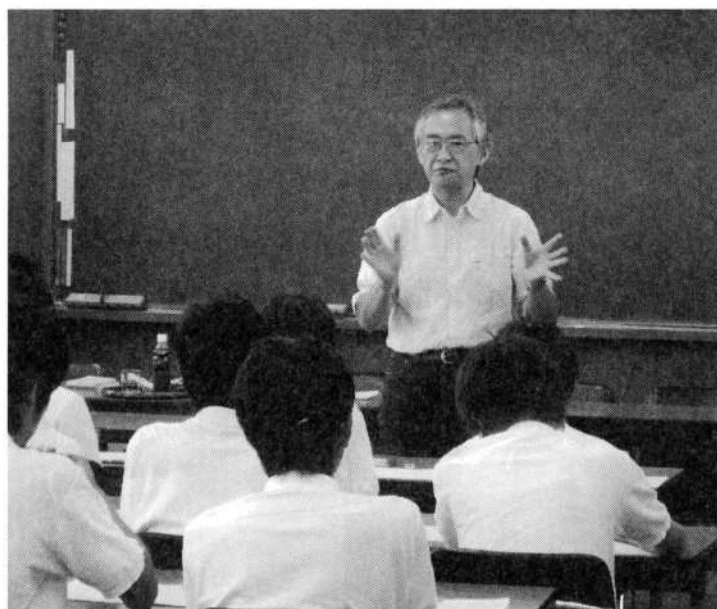
「各学年の現状」

〈第一学年〉

入学して九ヶ月が過ぎ、生徒たちもかなり学校生活に慣れてきました。入学当初のまだあどけなさの残る顔つきが高校生らしく変化してきています。地域のリーダー育成を目標としている本校では、生徒に求めるものも知・徳・体ともに高いレベルになりがちですが、生徒たちは必死になってそれに応えようと頑張っています。

部活動等では、全国や関東で活躍し始めている生徒も出ています。全体的にも明るく素直で、可能性を感じさせる生徒が多く、学習面でも根気強く努力し続けられれば必ず各々の目標を達成できると信じています。

将来に向けての進路選択においては、日頃からHR単位で自己の適性や社会・職業などについて考える進路学習を行うとともに、十月には県内の企業や研究所を訪問して見識を深めたり、外部講師を招



いて進路講演会を開き、大学進学に関して意識を高める機会を持ちました。また、七月・十二月の三者面談を始めとして個人面談を定期的に行い、希望進路実現に向けてサポートを充実させています。その成果は外部模試等でも着実に現れ始めています。家庭学習時間が不足気味の生徒がいる等、まだ課題はありますが、時間をかけながらも目指す方向性はぶれることなく指導していきたいと考えています。

〈第二学年〉

スタート当初から「中だるみさせない」ことを目標に、

学習指導・生徒指導に取り組んでいます。毎日記録させている家庭学習時間は、まずまず増えてきているようですが、服装面、特に女子のスカート丈については一年次に比べると、やや緩んできているような状況も見受けられます。学年集会や担任面談等を通じて引き続き指導を徹底させていこうと考えております。

まず、最大の学年行事として、一〇月三日～六日に北海道への修学旅行を実施しました。

天候にはあまり恵まれませんでしたでしたが、それでも「北の大地」での様々な体験は、生徒達にとって思い出に残るものになったようです。

進路関係では、大学見学会を例年よりも早い六月二九日に実施しました。自分ではなかなか見に行けない大学にしようというところで、東大・東

工大・会津大・前橋工科大・福島大・群馬大・高崎経済大・千葉大を訪問してきました。

紫西会報

施設の整ったキャンパスを見学したり、興味深い模擬講義

を体験したりすることで、生徒たちは大学進学への意欲を高めたようです。

また、一〇月二七日(水)

には進路講演会を開催しました。修学旅行も終わり、いよいよ本格的に受験対策に乗り出す時期ということで、ベネッセコーポレーションの船橋朗先生をお招きして、「受験生になるために」という演題でお話いただきました。とても丁寧でわかりやすいお話でした。先生のお話を聴いて、生徒諸君もやる気が湧いてきたようです。十二月一日(水)の学年集会の折に生徒たちには説明しましたが、一月からは『三年〇学期』という意識を持って学習に取り組んで欲しいものです。

冬休みに入った二二月二七日にはAM七:三〇～PM七:〇〇までの特別課外授業を実施しました。午前中は主に

自学自習を、午後は英語や社会の講義も実施しました。「集中力が一日もつのかな?」という不安もありましたが、生徒たちはずっと真剣に取り組み続け、あっという間の一日でした。これを機に、受験勉強に取り組む姿勢というも

のを身につけていって欲しいと思います。

〈第三学年〉

いよいよ今までの学習努力が問われる季節が巡ってきました。生徒達も受験生である自覚が確立され、目標に向かって研鑽を積んだ一年だったと思います。面談も繰り返し実施され、受験校もほぼ決まりつつあります。しかし、振り返れば順風満帆とばかりは言えなかった一年だったのではないのでしょうか。模擬試験の出来に一喜一憂したこともありました。自分の学習方法は正しかったのかと、自信をなくし不安に苛まれることもあったでしょう。しかし、今までの艱難辛苦を思い出して、自分には不可能はないと確信をもってセンター試験に臨んで欲しいものです。

十月からの推薦入試では国公立大学合格者が十七名、私立大学では、指定校推薦で十九名、また一般推薦で三名が合格して進路を決定しています。詳しくは以下のとおりです。

国公立大学推薦入試合格者十七名

筑波大学 四名
埼玉大学 一名
新潟大学 一名
岩手大学 一名
群馬大学 二名
宇都宮大学 四名
県立医療大学 三名

武蔵野女子大学

成蹊大学

立命館大学

明治学院大学

(各 一名)

青山学院大学

東京家政大学

中央大学

(各 二名)

東京理科大学

(二名)

国公立大学AC入試合格者一名

筑波大学

私立大学指定校推薦入試合格者十九名

大妻女子大学

津田塾大学

慶応大学

明治大学

女子栄養大学

明治薬科大学

私立大学一般推薦入試合格者三名

立正大学

法政大学

東洋大学

(各 一名)

公務員試験合格者一名

警視庁



本校では二百七十名の生徒が、一月の平成二十三年度大学入学者選抜大学入試センター試験を受験します。試験後は国公立二次試験対策の課外授業や小論文指導、面接練習などに取り組み、生徒と職員が一体となって努力し進路希望実現に向けて邁進します。

主な大学合格者数

(年度は入試年度です。)

(主な国立大学)

大学名	22年度	21年度	20年度	19年度	18年度
東北	1	0	0	2	2
山形	1	4	0	2	2
福島	4	4	0	1	1
茨城	38	18	17	21	29
筑波	13	9	11	11	16
宇都宮	19	17	18	13	8
群馬	2	5	1	2	3
埼玉	7	8	7	5	3
千葉	4	3	1	4	4
東京	0	0	1	0	1
一橋	0	1	0	0	0
東京工業	1	1	1	0	0
東京外国語	0	0	1	0	0
横浜国立	0	3	2	0	0
その他	5	7	3	3	14
国立大計	95	80	64	64	83

(主な私立大学)

大学名	22年度	21年度	20年度	19年度	18年度
国際医療福祉	14	27	16	20	24
獨協	14	12	9	9	13
文教	12	19	7	10	16
青山学院	6	10	9	6	6
大妻女子	12	12	0	4	0
北里	6	6	4	2	9
慶應	4	3	6	2	3
国際基督教	0	0	0	0	0
駒沢	13	14	11	11	25
芝浦工業	27	12	12	13	17
上智	0	1	1	4	0
専修	12	22	12	11	15
中央	11	17	13	8	12
津田塾	2	1	2	0	3
東京女子	1	4	0	0	2
東京薬科	1	5	1	0	1
東京理科	19	8	11	10	17
東洋	40	34	23	28	38
日本	37	30	16	25	20
日本女子	2	3	1	3	1
法政	16	25	18	17	15
東京都市	7	8	2	9	10
明治	12	19	5	17	14
明治学院	8	16	2	10	13
立教	4	6	2	8	9
早稲田	4	6	2	2	6
その他	217	341	241	274	350
私立大計	501	661	426	502	639

(主な公立大学)

大学名	22年度	21年度	20年度	19年度	18年度
高崎経済	5	6	2	2	3
県立医療	5	5	2	3	9
首都大東京	3	7	2	1	2
横浜国立	0	1	0	1	3
その他	6	12	4	10	12
公立大計	19	31	10	17	28

進路決定先人数

年度	国公立大	私立大	短期大学	専門学校	就職	未定・他	卒業者数
22	88	133	0	4	1	52	278
21	82	161	5	6	3	21	278
20	65	133	0	13	1	62	274
19	64	162	5	9	4	32	276
18	90	150	3	6	2	29	280

2011年度大学入試センター試験平均点

科目	国語	数学ⅠA	数学ⅡB	英語	世界史B	日本史B	地理B
本校平均	106.9	68.7	51.8	119.5	62.8	63.9	57.5
全国平均	111.2	65.9	52.4	122.8	61.4	64.1	64.4

科目	物理Ⅰ	化学Ⅰ	生物Ⅰ	リスニング
本校平均	60.7	51.3	63.2	25.2
全国平均	64.1	56.6	63.4	25.2

活躍する一高生

文芸部全国制覇

文芸部 島田瞳 寄稿

私たち文芸部は、八月に開催された全国高校生短歌大会に出場し、団体戦で優勝、個人戦で最優秀賞と優秀賞を獲得することが出来ました。これは決して私たちだけの力ではなく、支えてくれた家族、そして、先生のおかげです。先生はいつも、「俳句は客観、短歌は主観。だから短歌は、自分の心を、感情を、その昂ぶりを、ことばにすればいいんだ」と教えてくださいました。



私たちは歌を詠む時、自らの体を、果てしないことばの海に放り込み、そこから必要なことばを探し出し、両手に抱え、そうして岸を目指して泳いでゆくような、そんな感覚を、少なからず持ちます。ただ、これはあくまでも感覚の話であって、実際には、私たちは三つの行動を取ります。「思う」「書く」「声に出す」、これらを繰り返すことで、歌は浮かび上がってくるのです。

「思う」とは、自分が今、



何を詠みたいのかを考えることです。それは鮮烈な思い出であったり、やり場の無い感情であったり、何てことのない日常であったりします。私たちは、私たちの心の中を揺蕩う、何か“を、必死に拾い上げてはことばにして、歌にしようとするのです。そしてある程度のことばたちが歌となりかける時に、「書く」のです。実際に文字にしてみるのです。書くことは鉛筆を握った瞬間から始まります。その瞬間、指に伝わる

鉛筆の感触とほんの少しの緊張感の中で、書き始めるのです。芯と紙とが擦れ合う振動をまさまじと感じながら、文字となった歌を目にする。ここで、自分が詠もうとする歌に対して新しい認識を持ち、それを元に一言一言を見直し、吟味し、推敲を重ねます。そうやって歌の形が整ってきたところで、「声に出します。今自分の目の前に現れた自分自身の歌を読み上げてみます。すると歌はいよいよ私たちの元を離れてゆき、そ

の離れたところから音として感じる歌の新しい表情を汲み取り、そしてまた推敲します。私たちの元を離れる…。歌は、私たちが離れてゆくのです。始め、自分の頭の中で考え、思っていたことは、ことばとなり文字となり、または音となり、短歌という形でもって、私たちの内面から、外部へと向かうのです。これこそ、主観性をもつ短歌ならではのものです。主観的だからこそ、本当の意味での、「自己」が顕になります。ただ自己というのは、常に複

雑なもので、常に人生や命という大きなテーマのようなものをはらんでいて、自分自身で理解することさえ難しいければ、ことばにするなんてさらに難しいことです。それでも、漠然とした感覚の中、ことばと向き合うことで、自己、その存在と意味を探し続けた三年間であったと思っています。明確な答えがあったわけでもなく、そんなものが本当にあるのかは未だにわかりませんが、これからも、私たちは探し続けてゆくのだと思います。

